

# 平成28年度第1回大阪府総合教育会議

## 議事録

日 時 平成28年9月2日(金) 13時30分～14時45分

場 所 災害対策本部会議室

出席者 知事 松井 一郎

教育長 向井 正博

教育委員 小河 勝

教育委員 井上 貴弘

教育委員 岩下 由利子

教育委員 竹若 洋三

教育委員 良原 恵子

<梅花高等学校>

副校長 六室 匡司

教諭 フレデリック・プロッツ

<清教学園高等学校>

校長 森 創

副校長 森野 章二

## 1 開会

(吉田室長)

皆様におかれましては、ご多忙中、ご出席賜りましてありがとうございます。

私は本日の進行を務めさせていただきます、大阪府政策企画部企画室長の吉田と申します。よろしくお願いいたします。

お手許の方に、資料1から2、3-1、3-2、4と配っております。念のためにご確認いただけたらと思います。

出席者につきましては、資料1に出席者名簿をお配りしておりますので、ご覧いただけたらと思います。

また、本会議につきましては、資料2の要綱でございますように、公開で行うということになっておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、開会にあたりまして、知事から一言ご挨拶を申し上げます。よろしくお願いいたします。

(松井知事)

皆さんこんにちは。

本日開催する総合教育会議は、知事と教育長・教育委員が公の場で教育政策について議論をする場として、昨年度法律で位置付けられたものです。

昨年の会議においては、大阪府教育振興基本計画を教育に関する大綱として位置付けるとともに、体力づくりについて意見交換を行いました。

あわせて、子どもたちの貧困問題における連携についても述べさせていただき、今年度、福祉部において教育委員会の協力も得ながら実態調査を実施したところであります。

本日は、「公私の切磋琢磨と連携・協力による英語教育の充実」をテーマに意見交換をさせていただくこととなりますが、有意義な機会となるよう、教育長並びに教育委員の皆さん、また、私学関係の皆さん、よろしくお願いいたします。

(吉田室長)

それでは、次第に基づきまして議事に移らせていただきたいと思います。

<議題1：公私の切磋琢磨と連携・協力による英語教育の充実>

議題1は、いま知事から申しましたように「公私の切磋琢磨と連携・協力による英語教育の充実」とさせていただきます。

それでは議題、議事の最初ということで知事の方からまた一言お願いします。

(松井知事)

公私の切磋琢磨、そして先ほどご挨拶させていただきましたけれども、英語教育というところは、これからまさに次の世代、もう世界の距離が短くなっていますんで、世界の中で一番通用する英語力というのは、これは日本の子どもたちにマストに必要な能力だと、こう思っています。大阪府といたしましても公立の学校で英語教育に力を入れる

ということで、いま教育長の下、「スーパー イングリッシュ ティーチャー」などを導入しながら英語教育、力を入れておりますが、ぜひ私学の皆さん方、さらに特色を持った教育現場を作り上げられていると思いますので、ぜひお互いのいいところをミックスして、さらにバージョンアップできるような教育現場を作っていきたい。そのことが子どもたちの能力を高めるということになり、その子どもたちが社会に出た時に、世界の同じような世代の人たちとの切磋琢磨の中で生き抜く力をつけていけるんだらうと、そう思っていますので、ぜひ闊達な意見をよろしく願います。

(吉田室長)

知事の方から公私連携、英語教育についてご発言ありましたけど、教育長いかがでございますでしょうか。

(向井教育長)

教育長の向井でございます。どうぞよろしく願いをいたします。

まず、本年4月に教育行政の一元化ということになりまして、議会等からは様々なご意見いただいております。4月以降、私学監を設置いたしまして、精力的に私立学校40校に伺い、実際にご意見をお伺いいたしました。その中では、むしろ、「新たな体制になりましたので、大阪の教育力向上に協力したい」というご意見が多かったというふうに報告を受けております。

本日の会議のテーマですけれども、「公私の切磋琢磨と連携・協力による英語教育の充実」ということです。本日、優れた実践をされておられます梅花高等学校さんと、清教学園高等学校からご参加いただいております。どうぞよろしく願います。ありがとうございます。

次に、公私連携でございますけれども、今年度、教育庁の中に「公私連携プロジェクトチーム」を設置いたしました。この6月～7月に私立学校・園の方々に研修、また本府が実施しております事業についてのアンケート調査を実施いたしました。

約8割の学校からご回答をいただきまして、現在、公と私、連携できるメニューの具体化について検討を行っております。すぐに連携できるということで、例えば読書活動推進のための「OSAKA PAGE ONE キャンペーン」、また学校体育活動におけます事故防止に関する研修会、これにつきましては、既に私学の皆様にご参加いただいております。

本日は、公立と私立の交流、また情報共有を進めていくきっかけとなるような有意義な意見交換をお願いしたいと、こう思っております。

どうぞよろしく願います。

## 2 取組事例の報告

それぞれの英語教育の取組みについて説明。

- ・梅花高校（資料3-1）
- ・清教学園高校（資料3-2）
- ・教育庁高等学校課（資料4）

（吉田室長）

ありがとうございました。英語教育について、梅花高校様、清教学園様、教育庁の高等学校課の方からそれぞれ発表いただきました。いまの発表を踏まえて、まずは知事の方からご意見・ご感想、ありましたらお願いします。

（松井知事）

梅花高校さんも、清教学園さんの方も私学ではネイティブの先生でも極々自然というか、当然というか、プロッツ先生も。いつ頃からネイティブの先生を入れて英語教育をやられたんですかね。まず梅花では。

（プロッツ教諭）

ずっと昔から。

（六室副校長）

創立の時から。

（松井知事）

創立は明治ですもんね。その時からですか。清教さんも。

（森野副校長）

そうですね。65年前の創設の時からですね。

（松井知事）

それに比べますと公立は、ここ5年くらいの話なんで。なかなか英語教育というところは、見本は私学にあるんだろうなと。僕はそういうふうにいま感じました。僕でいくと、世界でこの英語力がごく普通に通用するというと、洋画を観て字幕のいらない洋画を観れるくらいかなと思うんですけど。それは大体留学して帰ってきたらそのレベルまでいくんですか。

（六室副校長）

何年行くかによります。

（松井知事）

3か月じゃどうなんですか。

（六室副校長）

3か月では、はっきり言ってそこまでにはならない。やはり向き・不向きとかもございますし、中学生くらいの生徒でしたら、単なる憧れという部分もあります。自分が英語を使っている将来像を描けるのかどうかというところの見極め、いわば、お試しという部分も正直ございます。

留学を通じて、自分はこの道に進みたいと思った生徒は、今度、大学の方で1年間、あるいは2年間という留学に繋がっていく、その3か月で全てを完結させようっていうのはなかなか難しいです。

(松井知事)

大学時代に1年、2年行くとそのレベルは、近づいてくるというくらいまで行けるんですかね。勿論、興味を持ってやらなければ、勉強しないとダメだと思うんですけども。

(森野副校長)

1年で帰ってきた子達は、映画の種類にもよるんですが、ディズニーとか子ども向けの映画であれば、そこそこ字幕なしで理解はしております。

(松井知事)

是非、少し時間はかかるでしょうけれど。これから日本の子どもたちがビジネスの時に喋れるという。僕もアジア各国出張しますけれど、大体ミャンマーとか、これから成長していこうという国も、母国語と英語で会話してしまして、そういう子どもたちがこれからもすごく熱心というか、豊かになりたいという、そういう気持ちがすごく熱いものを持っている。だからどういう時代に日本の子どもたちがどういうポジションを作っていくかというのが、非常に大事だと思うんで。

圧倒的に生徒が多いのは公立が多い訳で。やはり梅花さんも清教さんも、明治と昭和初期から始まっているんで、見習うところは見習って、まさに家庭の格差によって英語力の差にならないように、良いところを取り入れさせていただこうということで、お願いします。

清教さんに聞きたいんですけど。一挙に生徒が集まりすぎて、ネイティブの先生を急に集めないといけなくなったという話があったじゃないですか。ああいう時は、どう集めるんですか。

(森校長)

ベルリッツに協力をお願いしていますので、無理をお願いするということですね。

(松井知事)

そこをお願いして集めていただいて、そういう。

(森校長)

はい。

(松井知事)

どうもありがとうございます。

(吉田室長)

知事から今お話ありましたけれども、教育委員の皆さんも、いまの知事のご意見とかを踏まえて、ご意見ありましたらお願いします。

(井上委員)

清教学園さんと梅花さん、お伺いしたいんですけども。生徒さんの志望進学先というのは、海外の大学に向いてきているんだろうなと思うんですけど、将来就きたい職業とかそういうものに対して変化とか出てきているんですかね。英語教育、力を入れ始めてから。

(森校長)

そうですね、本校の場合は先ほども申し上げたように当初から英語に大変力を入れていきますので、現在の卒業生を見ても、例えば、国連関係ですとか、海外で実際に活動している卒業生も随分たくさんおります。ですから、このことが始まったからではなしに、やはり積み上げとしてたくさんの海外の方と交流をすることを通して、自分の未来を海外との関係を模索するような形で進学していく子たちもたくさんいるのは間違いありません。

(井上委員)

そこでは英語だけじゃなくて、例えば他の社会、歴史であったりとか、地理であったりとか、そういった他の授業の中でも、そういう海外との関わりとか、グローバル社会であるとか、そういったものを、意識した教育というものなさっているんですか。

(森校長)

そうですね。いわゆる教科横断型の授業というのを構築しております。ですから、世界史と英語がコラボしたり、そういうようなことも現在進めているところであります。

(井上委員)

その世界史と英語がコラボするとは、どういう授業なんですか。

(森校長)

教員同士がお互いに情報を共有しながら世界史のこの部分を具体的に、英語で資料を読んだりするというようなことです。

(井上委員)

ありがとうございます。梅花さん、お願いします。

(六室副校長)

本校は、女子高ですが、元々女の子というのは英語に興味を持っている子が多いので、色々な新しい教育を取り入れたとしても比較的スムーズに入っていく部分があります。素地はあると思います。

清教さんと同じように本校も、例えば英語教育となると、英語の先生が主体となりますが、先ほどありました ICT 教育をやるにしましても、やはり教科横断で行っております。まず委員会をつくって、少しずつ積み上げていって、それを他の教員に広げていくという、こういう姿勢でやっております。というのも例えば「来年度から梅花高校はこういうふうにします。」と最初に看板を挙げても、なかなか現場がついてこないということって本当に教育現場ではよくあります。ですので、本校の ICT のメンバーに例えれば、

全部の教科の先生に入っていて、そして、そのノウハウを共有した形で、その時点で初めて生徒におろすということを行います。だから横の繋がりというのは、教育の場合では一般の企業以上にある意味必要なのかなというふうには考えております。

(竹若委員)

梅花高校さんも清教学園さんも、公立の高等学校もそれぞれの立場で一生懸命取り組んでおられる状況を聞かせていただいて、大阪の英語教育も教育力の向上ということでもいいものを聞かせていただいたと思いますけども。

ちょっとお聞きしたいんですけども、ネイティブの講師を入れておいでになるんですか。これは高等学校が独自に採用されているんですか。

(六室副校長)

本校はそうです。

(竹若委員)

そうですか、ありがとうございます。

(森校長)

本校も独自に採用しております。本校も、専任のネイティブ教員がおりますので、その者が中心となって、ベルリッツと相談をしながら入れていくというのが現実です。

(竹若委員)

それから、こういう席でありますので、知事もおいでになりますから。行財政改革、非常にご苦勞いただいている知事の前で、こういうことを申し上げるのは非常に恐縮なのですが。

やっぱり「教育は投資」と言って、私も、ある市町村で小学校の英語教育を充実させて、何て言いましてもやっぱり公立では、先生方の指導力の向上というのが一番。ひとつはネイティブに頼って、高等学校の先生方の指導力の向上、これもひとつの方法なんですけど、思い切って府立学校の先生方の短期間留学というのが、これは非常に効果があるだろうと思います。

ただ単に留学させるんじゃなしに、例えば知事が常々お考えいただいています、大阪に照準をあてたときに、そういう点に大阪の高等学校の英語教育に当てはめたらいい。子どもたちが大阪の歴史なり文化なり、そういう地域の特性というものを英語でガイドができる。

こういうことに焦点をあてた時に、教員の留学も含め、それこそ公私切磋琢磨というやつで、それぞれの私学の子どもたちも公立高等学校の子どもたちも、それこそ知事の言葉で言いますと、経済の格差関係なしに、自分の地元のことが英語で説明できる子どもの育成というものを大きな視点でお考えいただく時には、また知事の英断をいただかなあかんと思いますけども。

(松井知事)

いやもう市町村もうちょっと頑張らなあかんね。頑張っている市町村と格差出てきて

ますんでね。教育にお金かけているのが。だから頑張っている市長の下では、英語教育とか、それから例えば幼児教育でもね、いろいろと財源を投入しているところと、そういうところじゃないところにお金使っているところとね。これいろいろあるんですけどね。是非、各市町村で財源を確保して、そういうところに投資してもらいたいと僕は思っているんですけどね。

(竹若委員)

ありがとうございます。

(松井知事)

あんまり言うと政治の話になるんで。

(小河委員)

私、4年前から1年間ほどインドネシアのスラバヤで、JICAのプロジェクトで仕事をずっとしていたことがあるんですが、その時に向こうでスラバヤ工科大学というインドネシアで上位の、トップクラスの大学ですけど、大学生たちを使ってやっていたんですけども、彼らもうほとんど誰もかれもみんな英語達人なんです。

「どこで勉強したんですか」って聞いたら、「別にインドネシアの教育の中でそんなに勉強はしてない」って言うんですよ。「ええっ」と言って、よく聞いていったらアニメとDVDで小さい頃から名作といわれるのは、とことん義務じゃなくて面白くてどんどんどんどん覚え込んじゃったというような、かなりスパンの長い時代的な形成でそういうふうになったんですね。

それを聞いていて、今ちょっとお話ずっとご紹介していただいている様子を聞いていて、思ったんですが、我々の頭の中には、どうしても英語っていうと英語の先生、経済学部っていうと文系というふうな、何と云うか色分けをしたって、それに関係のないものはいらんだというような意識がどうしてもこびり付いているなということを思うんです。

ところが経済学なんていうのは、今はもう数学ができなきゃ話にならないじゃないですか。それから今はずっとおっしゃったように理系は英語できなきゃだめですし、そういう問題をずっと考えてきますと、学際的なこの切り替えですね、幅広い知識をまず持つということが本当に必要な時代になっているんだなということを痛感するんです。

そういう意味でも今の竹若先生がおっしゃったような大胆な何て言うか留学制度を設けて、例えば教員をどんどん派遣して、これちょっと予算いりますけど。

それは英語の先生から始まるということは当然そうなるでしょうけれども、別の教科からでもどんどん希望する人はチャレンジできるようなフィールドを大阪府としては構築していただければと。

そんなものがあるなら大阪府受けたいなって言って流れこんでくるというぐらいのアピールポイントになるんじゃないかなというふうに思うんですけどね。



(松井知事)

旅行だけ行って、おしまいじゃ話になりませんからね。

(小河委員)

それはそうですね。だから何かハードル、課題というか、そういうものを。

(松井知事)

ある一定のレベル達してきてくれなければ、そこで終わってもらおうとかね。

(小河委員)

期間区切ってね。

(松井知事)

それだけ投資するかわり、そのレベルに達してない場合は、やっぱり、まあ言ったら教師として実力そこまでいかない訳で、違うお仕事をみつけた方がいいんですかっていう話になりますからね。

(小河委員)

その辺厳しくね。いずれにしても発想を切り替えた何か仕組みというのを考えていく必要があるんじゃないかなっていうことを感じたんですけどね。

(吉田室長)

ありがとうございます。他の先生方いかがですか。

(岩下委員)

今日、この説明を聞くのをすごい楽しみに来たんですけども。もちろん、私が高校時代があった英語教育とは比べ物にならないとは思っていましたが、これだけ素晴らしい内容というのですごく感動しました。これは本当に続けていけば、私たちが目標としている英語教育に英語力にすごくレベルが絶対上がると思えました。確信しました。

ひとつですね、プロッツ先生にお聞きしたいんですけども、先生が日本に来られて、私は日本人というのは、凄く繊細で、多分賢い人が多いと思うんです。それで、義務教育で中学生からほとんどの人が英語を習っています。3年間習っているんですね。ですが、なかなか英語を活用することができていないような気がするんです。

例えば、普通の英会話ぐらい、普通の日常会話ぐらいでも普通だったらしゃべれるはずですよ。3年間で単語も習っているし。先生が日本に来られた時に、日本人の英語力に何が足りないのかとか、一番の感じたことをお聞かせ願えますか。

(プロッツ教諭)

一番の問題は、みんな英語をしゃべるのが怖いんですよ。間違ったら悪いと思って。もうそれでしゃべれない。ずっとしゃべれなかったら英語は上手にならない。悪循環ですよ。その怖さをなくしたらいいと思います。それが、英語を習うにあたって、多分大きなバリアーですね。

(岩下委員)

ありがとうございます。あと梅花高校さんと清教学園さんにお聞きしたいんですけど

も。

今、大阪府では小学校から英語教育ということで、デモンストレーションで始めたところなんです。実際に高校さんの方では素晴らしい教材を持って進められていますが、いきなり例えば、中学校に入ってからだと、かなりリスクは大きいような気がするんです。たまたま来られている生徒は、きっとお勉強ができる方がほとんどだと思うんですけども、例えば、もし小学校の時に英語教育ができるのであれば、何がなんか一番、これだけは絶対やっておいて欲しいってことはありますか。必要なものは。

(六室副校長)

ちょっと、お答えになるかどうかわかりませんが。やらなければいけないことのもう一段階前に、私がネイティブと一緒に学校で英語教育を行っていて思うのは、ネイティブは、本当にその生徒をその気にさせることがうまいです。

若い教員にも研修の中で言うんですけど、「人は命令では動かない人は心が動いた時に初めて動くんだ」と、「自ら動くんだ」と。だから生徒に「これが大事なんだ、これをやっといたら大学受験に有利なんだよ」と言っても、心に響かなかつたら生徒は動かないです。

その点、例えばネイティブの先生がさっき言ったみたいに、日本人って、ちゃんとした英語を言わないと駄目みたいな恐怖心を抱いている人が多いと思います。だから”He am”と言っても私はいいと思うんです。主語が **He** ということは、**be** 動詞は **is** にしないといけないとか、3人称単数なので **s** をつけなければいけないとか、よくできる生徒ほど先にそこを考えてしまうんですね。意外と留学に行って成功する生徒は、真面目すぎるよりも、日頃はやんちゃでよく指導されているけれども、少々のことにも動じないメンタルの強い生徒が多くのことを学んで帰ってきます。ということは、英語力（英会話力）が伸びる生徒は、高いモチベーションを持っているんです。なので、やはり小さい時からあまり細かいことを指摘せず、しっかり授業の中でも褒めてその気にさせる、そのテクニックは、ほんとにネイティブの先生は素晴らしいなと思います。

だから例えば、大人しくて何も言えない子に、一言「**YES**」と言わせるだけにすごいいろんな球を投げられるんです。それでその生徒が「**YES**」と言ったら、「**Right!** そうだよ！」と言う。そしたらその子は、「何か英語が通じたんや」みたいな、「次、頑張るか」と心が動きます。その繰り返しじゃないかなと。

だからシステムを構築するとか、教員のスキルを上げるというのは、すごく一面大事なんですけども。子どもたちの好奇心をどう刺激していくかというノウハウをしっかりと付けていくことは大事なんじゃないかなと思います。だから「何を望みますか」と言われたら、そういう好奇心をしっかりと育てるようなそういう球を投げおいていただけたらなというのは思います。

(岩下委員)

ありがとうございました。

(森野副校長)

本校が英語教育のひとつのモデルとしている学校として、東京に鴎友学園という学校があります。そこでは中高で英語を教えておられるんですが、中学時代は文法を教えず、日本語を全く使わずに英語だけで全て進めていかれるんです。高校に入って初めて生徒たちは、自分たちが中学時代使っていたこの英語が不定詞ですとかいうふうに知ったりするんです。つまりネイティブの子どもたちが英語を身に付けていくようなプロセスで英語教育されているんです。

それは理想かもしれませんが、小学校で十分な英語の授業時間が持てるのであれば、小学校時代にそういった感覚を身に付けて、中学校に入ってある程度学問的に英語をするっていう形ができれば理想だと思います。

授業時間があまりたくさん取れないという状況であれば、ひとつは英語への興味ということをしっかり小学校時代に付けておいて欲しいと思いますし、あと、若ければ若いほど耳はすごく柔らかいので英語の音をしっかりと聴かせるという形で、英語のインプット、ナチュラルな英語のインプットをたくさんしておいていただければ。あとは中学の方でしっかりそれを理論づけていくという形での指導ができるかなと思います。

(岩下委員)

ありがとうございました。二校とも素晴らしいお答えをありがとうございました。

(松井知事)

質問ですけど、昔は単語のやつね、こう持ってね、裏に書いて、カタカナ書いて、ずっとぶら下げて一生懸命覚えて、そういうのは必要なんですか。

(六室副校長)

時期によって、インプットしなければいけない時期が絶対あると思います。大学のセンター試験が駄目じゃなくて、一定期間単語を覚えるとか文法事項を覚えるというのは、やっぱり集中的にやらなければいけないと思うんです。それを一切やめてしまうというのは、私はどうかと思います。

(松井知事)

それもやられている訳ですね。単語を覚えさせるというのは。

(森校長) (六室副校長)

はい、やっています。

(森野副校長)

本校の生徒たちを見ていると、若干、やり方が変わってきているかとは思いますが。今までは単語帳を見ながら綴りを覚えていたのが、今は音声聴きながら、そういう教材がたくさん出ていますので、音声と結び合わせて覚えていくというのをやっている子が増えてきています。

(松井知事)

耳が柔らかいということですね。それ。

(森野副校長)

それからリスニングがセンター試験に導入されたということも大きいと思うんです。

(森校長)

それこそ iPhone とか、メーカー名言ったらいけませんけど、こういうものをたくさん持っていますので、ほんとに教材を耳から聞くというようなことは、比較的たくさんの子どもがしております。

(吉田室長)

良原先生、いかがですか。

(良原委員)

はい、素晴らしい取組について教えていただきまして、ありがとうございました。

先ほど岩下委員からの質問に対してのお答えに、話すことの怖さを取り除くこととか、それから小さい時から英語に興味を待たせる、その気にさせるというお話を両校からいただきましたが、その辺についてもう少し具体的にどうということが学校としてできるかを教えていただけたらと思うのが1点、もうひとつは素晴らしい取組をしておられる中で、ちょっとやっぱりここは難しいと感じておられるところ、ご苦労しておられるところがございましたら教えていただきたく存じます。

更に次のステップとして、こういうふうにかんがえていきたいとお考えのことがございましたら教えていただけたらと思います。よろしくお願いします。

(森野副校長)

私からよろしいですか。まず、英語を好きになって、あるいは英語を楽しんで来てほしいというふうなことに限らず、どうしても英語って受験の道具という印象が大きかったと思うんです。

そういったところ、小学校であれば、取っ払うことができると思いますので、英語を楽しんでいく。ネイティブの先生が入られて、英語というものが勉強、学習ではなくて科目ではなくて、言葉としてネイティブの方、あるいは外国の方と交流する為の道具であって、これが通じたら外国の人たちとコミュニケーションできるんだ、楽しいというそういう経験をたくさん積んでいく。海外研修たくさんやらしているのは、あるいは海外からお客さんをたくさん受け入れているのは、そういった体験をしていく中で、生徒たちが英語というものに対する見方を変えていくという事柄の為にというところはあります。

(良原委員)

後でテストなどでチェックされたり点数化されるといったことはないということですね。

(森野副校長)

そうですね。もちろん進学ということを考えると、今、受験システムがまだ今の形です。指導はしないといけないんですけれども。そういった意味では、今、困ってい

ることでいいますと、受験英語の指導は、受験英語として残っているんです。

しっかりと長文を読むとかいったことが残っておりまして、それと、実際の4技能を鍛えていくということの両立が、今、時間が限られていますので苦勞しています。何とかそこが実際の受験ということも、そういった取組みが活かされるような受験に変えていけば、より時間を有効に使えるかなというふうには思います。英検とか TOEFL とかを試験に使うということが、今、検討していただいていますので、少し変わっていくかなというように思うんですけども。

(森校長)

本校でもですね、英語の授業だけで6時間とっているんです。1週間当たり。ですから授業としては、たくさん触れる機会というのを取っている訳です。

今年、新しく導入したもので言いますと、先ほども少し出てきましたけれども、子どもたちがよく読んでいるマンガの英語版です。

こういったものを導入して、やはり身近に興味を持って進んでいくという。そういうことってというのは、非常に大事なかなというふうに思うんです。やはり小学校であればあるほど、そういう身近なものに対しては、それを読みたいというふうに思うと思います。

そんなことも参考になるのではないかなというふうに思います。

(六室副校長)

小さい頃から英語を習っている子どもたちと、いわゆる中一から英語を始める子どもたちの決定的な差は、その恐怖心じゃないかなと思います。

小さい時から「それは間違っているよ」とか、「それは文法的におかしいよ」なんてこと言われずに、英語をツールとして学び、欲を言えばツールとして同じ空間の中に、小さいネイティブのお子さんがいたりすると、それが中1になったとしても全然怖くないということがあると思うんです。

例えば本校の国際コースでもみんながみんな英語が好きという生徒ばかりじゃないんです。「ちょっと留学したいな」とか、その程度の子も正直いるんです。でも、留学生が1年間クラスに2人3人いるんです。そうすると、そこには利害関係はないので、普通に活動している中で、「英語が通じた!」「何か楽しそう」みたいな感じで、子どもたちの心が動いてくるんです。

だからちょっとしたノリで国際コース入ったつもりが、何か知らないけど、結局は英語の方面に進んでしまうというケースって、意外とあるんです。

また、留学生と本校の生徒がしゃべっていると、必ずしも英文法は正しいものじゃなかったりするんです。でも、本人たちは積極的にコミュニケーションをとっている。私はそれでいいと思うんです。

だから、そこへテストとかいうものが絡んできますと、生徒はまた一步引いてしまう。そこで恐怖というものが生まれてくるので、それはそれでいいじゃないかというふうに、許容する教員側の心の広さというものは一面必要ではないかと思います。

だから面接があつて、テストを別にするであるとか。小学校はネイティブの先生だけではなくて、地元の同じぐらいの年代の外国人の子どもたちとの、触れ合いの機会を小さな時から作っていくと、恐怖心が生まれないようにはなってくるのではないかなとは思いますが。

(吉田室長)

小河先生お願いします。

(小河委員)

プロッツさん、さっきも同じこと今おっしゃっておられると思うんですけども。

僕これ日本人の文化だと思うんです。完璧でないと使えないとか、ちょっとでも欠けたようなお茶碗はすぐに捨てなければいけないというような、そういうところに通ずるような美意識というんですか。それがすごいブレーキになって動きを止めているなというのを痛感するんです。ですからまさにその辺をどうやっていったらいいのかっていうのは、非常に難しい。

一方で文法主義でずっと来て、完璧に体系をマスターしないと本当に評価されない。ピリオドなかったらペケになっている訳ですから。そういう採点主義でずっと来た子どもたちが、本当に何をやっても間違ってしまうという状況で、一歩も口から出てこないという文化があるんじゃないかなというふうに思うんです。

これは教える側も少しその辺をどう考えていったらいいのかが公立学校なんかで、その辺は凄く難しいテーマだと思うんですけども。ちょっとこの辺は協議をしていかなければいけない大きなテーマだろうなというのを感じます。

(吉田室長)

ありがとうございます。非常に議論が盛り上がりしておりますけども、知事の次のご予定もありますので、そろそろ締めさせていただきますかと思っております。

次第では、「(2) その他」となっておりますけど、本当に時間がないですけど、何かこの場で言っておきたいというのがありましたら、どなたかおられますか。特にないようでしたら。お願いします。

(井上委員)

こうやって私学の方々こういう議論ができる場というのができたのは、画期的だと思うんですけども、逆に大阪府の教育庁に対して、英語を含めて連携できる中で、これからこういったことを期待しているというものがあれば教えていただきたいなと思うんですけども。

(森校長)

やはり大阪の教育を本当に底上げしていくということを考えますと、公立と私立というのがタグを組んでいかないといけないと思います。ですから自分のところだけというような狭い考えではなしに、お互いに良いものは評価しあえるような、そういう本当にグローバルということが言われている訳ですから、まさに大阪の中で、公私間もしっ

かりとつながっていく必要があるのかなと思います。

(松井知事)

ありがとうございます。まさに今まで、今年初めのころに、教育という分野でこういう会議をやるために公私一体「教育庁」をやろうとしたんですけど、いろいろ賛否両論、いろいろありまして。私学の方々からもいろんなご意見いただきまして、どちらかというとながティブな意見の方が多かったんですけど。

是非、こういう会合・会議ができることというのが、まさに大阪の特色で、これが出来ているのは大阪だけなんです。不思議なもので。何ともないじゃないですか。本気で皆さん、教育、子どもたちの為にどうしようと、英語力高めるためにどうしようという会議を今やっているんですけども。

全国でこうして公私の関係者集まって、公立の教育委員会と私学の方が一緒にやって、こういう会議をやるっていうのは大阪だけなんでね。是非これはいい事例だということなんで。またそういうふうに私学の団体の皆さんも、全国といろんな繋がりあると思いますんで、日本中で子どもたちが世界に通用する人材になるように、またご協力お願いいたします。

(吉田室長)

ありがとうございます。

それでは、最後に教育長の方からまとめてお願いします。

### 3. まとめ

(向井教育長)

ありがとうございます。いま知事の方からお話がありましたけれども、今回初めて私学の方も入っていただいた形で、こういう会議ができたこと、非常にありがたく思っております。

特に府立高校におきましては、先ほどちょっと触れましたように、ネイティブの先生、それから英語漬けの環境について、ちょっと力を入れておりますので、本日お聞きした中で非常に意を強くしたところがございます。この方向でこの後検討していきたいと思っております。

また英語教育だけにかかわらず、今後、私学団体の方からは教員の研修について一緒にやりたいというふうなご意見もありますので、それも踏まえ、今後は公立と私立の子どもたちの交流という、どのような形で出来るか分かりませんが、子ども同士の交流といった形も取り組んでいきたいなというふうに思っておりますので、今後ともどうぞよろしく願いいたします。

本日はどうもありがとうございました。

(吉田室長)

以上をもちまして、平成 28 年度第 1 回の総合教育会議閉会させていただきます。本日

は長時間にわたり、どうもありがとうございました。